

平成24年度教育事業「第33期はなやまボランティアスクール」

1 趣旨

ボランティア活動に必要な理論と技術についての実践的な研修を行うとともに、体験活動の指導者や支援者としての技術とボランティア活動に積極的に取り組む意欲を高める。

2 目標

- 青少年教育施設におけるボランティアの役割とボランティア活動について理解する。
- 自然体験活動の指導方法や救命救急法と安全管理などボランティアとしてすぐに生かせる知識や技術を習得する。
- 参加者や先輩ボランティアとのふれあいを通して、ボランティアとしての意欲を高め、研修終了後ボランティアとして活動する。

3 主催

独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家

4 期日

平成24年4月28日（土）～4月30日（月・祝）【2泊3日】

5 場所

国立花山青少年自然の家 及び 施設周辺フィールド

6 参加対象と人数

高校生以上のボランティア活動を志す方（一般成人・学生・高校生） 30名

7 参加状況

	宮城県		岩手県		山形県		神奈川県		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
高校生	0	0	0	1	0	0	0	0	1
学生	1	12	0	0	1	0	0	1	15
一般	1	0	0	0	0	0	0	0	1
計	2	13	0	1	1	0	0	1	17

【参加者所属高校・大学】

- ・岩手県立一関第一高等学校
- ・東北学院大学
- ・東北福祉大学
- ・宮城学院女子大学
- ・尚綱学院大学
- ・ソニー学園湘北短期大学

8 日程

	4月28日(土)	4月29日(日)	4月30日(月・祝)
午前		<p>朝のつどい 7:15～7:30</p> <p>PA体験① 7:30～8:00 実習指導 国立花山青少年自然の家職員</p> <p><講義Ⅱ> 9:00～10:30 「ボランティア活動の意義」 講師 NPO法人 野外遊び喜び総合研究所 代表 中嶋 信 氏</p> <p><講義Ⅲ> 10:30～12:00 「青少年教育施設における ボランティア活動の理解」 講師 NPO法人 野外遊び喜び総合研究所 代表 中嶋 信 氏</p>	<p>朝のつどい 7:15～7:30</p> <p>PA体験② 7:30～8:00 実習指導 国立花山青少年自然の家職員</p> <p>[実習Ⅳ] 9:00～12:00 「救命救急法」 講師 栗原市消防本部警防課 千葉 正晴 氏 栗原消防署西出張所 後藤 智美 氏</p>
午後	<p>受付 14:00</p> <p>開講式 14:30</p> <p>[実習Ⅰ] 15:00～17:00 HABプログラム① 「アイスブレイク・ 冒険の森体験」 実習指導 国立花山青少年自然の家職員</p>	<p>[実習Ⅱ] 12:30～16:00 HABプログラム② 「野外活動エリアを知ろう」 (スコアオリエンテーリング) 実習指導 国立花山青少年自然の家職員</p> <p>[実習Ⅲ-1] 16:00～19:00 HABプログラム③ 「環境に配慮した野外炊飯」 実習指導 国立花山青少年自然の家職員</p>	<p><講義Ⅵ> 13:00～14:30 「青少年教育施設の 現状と運営」 講師 国立花山青少年自然の家 次長 山川 忠彦</p> <p>諸連絡 14:30～15:30 ・ボランティアが関わる事業 ・先輩ボランティアから ・法人ボランティア登録 修了証授与・閉講式 15:30</p>
夜	<p><講義Ⅰ> 19:00～21:00 「青少年教育の理解」 講師 NPO法人 野外遊び喜び総合研究所 代表 中嶋 信 氏</p>	<p>[実習Ⅲ-2] 19:00～21:00 HABプログラム③ 「エコキャンプファイヤー体 験&先輩ボランティアとの交 流会」(キャンプファイヤーの 実際と火を囲んでふりかえり) 実習指導 国立花山青少年自然の家職員</p>	

9 実施状況

(1) 企画のポイント

- ・昨年度に引き続き、教育事業等での参加者支援を主な目的としたボランティア育成を図った。特に東日本大震災から1年が経過した今年度は、子どもたちへの継続的な支援を全面に打ち出しながら、自然の家でのボランティア活動を認知してもらうためのリーフレットを作成するなど、大学等へ参加を積極的に呼びかけた。また、社会教育実習を兼ねた授業の一環として学生が参加するといった大学等との連携を、継続して進めた。
- ・本事業終了後に、年間を通して自身のスキルアップを図る研修や教育事業等における子どもたちに対する支援を中心としたボランティア活動など、登録したボランティアが参画できる機会を数多く設定した。そのため、実践的な内容のプログラムで構成し、参加者が多くの学びを得て今後活かせるよう事業を展開した。
- ・事業への協力依頼などボランティアと職員とのやりとりをスムーズに行うため、担当職員の役割分担を明確にするとともに、ミーリングリストを活用した事業等の伝達システムを構築し、登録したボランティアとの連携を強化した。

(2) 運営のポイント

- ・昨年度まで講師をしていただいていた中嶋氏を今年度も招き、これまで数多く子どもたちとの自然体験活動に取り組んできた豊かな経験に基づいた実践的な話や、グループワークを交えた活動を取り入れた講義を行った。また、救命救急法についても同様に栗原市消防本部警防課に依頼し、野外活動時における緊急時に備えた実習を実施した。
- ・今年度は職員の他にも、登録ボランティアやボランティア経験のある方々からの協力を得てスタッフを増員することで、特にグループごとの活動時における参加者の支援や安全管理の面で十分な体制をとって運営した。また、プログラムの中に参加者とボランティアの先輩であるそのような協力スタッフとの交流できる時間を組み込み、つながりをつくる場や機会を設定した。
- ・それぞれの講義や実習によって内容が異なるが、各プログラムの関連性（連続性）を考え、つながりをもたせたプログラムを意識した。また、食事や入浴、睡眠など十分な時間を確保することで、参加者がゆとりをもって期間中を過ごしながら講義や実習に集中して活動できるよう配慮し運営した。

(3) 安全管理のポイント

- ・冒険の森体験では、ファシリテートする職員を中心にけがや事故を未然に防ぐ声かけを行った。また、朝のつどいやPA体験などの時間を利用して、スタッフによる体調チェックを行うなど参加者の体調管理に努めた。
- ・オリエンテーリングや野外炊飯において各参加者グループにスタッフを配置し、参加者が活動する際の支援を行うとともに、危険箇所や注意するポイントについて声かけをするなど安全管理を徹底した。
- ・キャンプファイヤーでは、終了後に参加者へヘッドライトを携帯させるなど、夜間歩行時の安全確保に努めた。また、翌朝の後片付けを参加者自身が行うことで、火気に対する安全への意識を高めた。

(4) 実施状況

◇開講式



17名の参加者を迎えて始まった開講式



増川所長からの主催者代表あいさつ

◇ [実習 I] HAB体験プログラム①「アイスブレイク・冒険の森体験」



アイスブレイクで緊張感が次第に和らぐ



体験を通して信頼関係が築かれていく

◇ <講義 I> 「青少年教育の理解」



講師の中嶋氏による講義



グループワークで更にチーム力を高める

◇朝のつどい



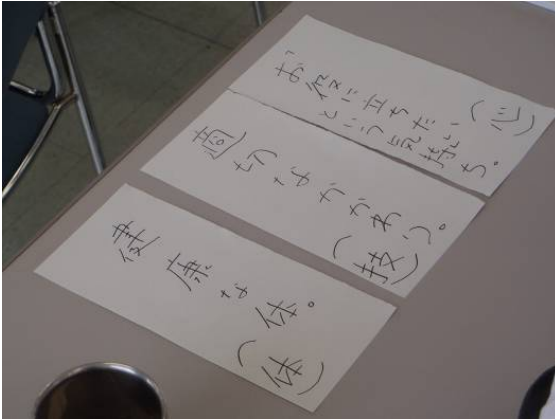
朝のつどいで旗の掲揚係を担当

◇P A体験



体験から多くの学びや気づきを得る

◇<講義Ⅱ>「ボランティア活動の意義」



ボランティア活動の意義を考える



ワークショップで合意形成

◇<講義Ⅲ>「青少年教育施設におけるボランティア活動の理解」



自然体験と指導者や施設の役割について



グループごとに発表しシェアしあう

◇ [実習Ⅱ] H A B体験プログラム②「野外活動エリアを知ろう」



弁当を持ってスコアオリエンテーリングへ

グループごとに作戦を立てて取り組む

◇ [実習Ⅲ-1] H A B体験プログラム③「環境に配慮した野外炊飯」



グループごとにテーマを設けて調理

出来上がったカレーと「ハイ、ポーズ！」

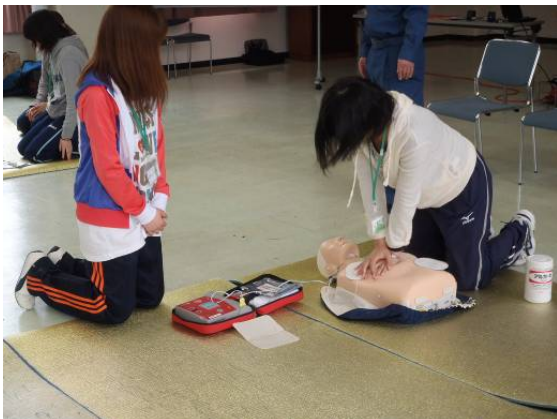
◇ [実習Ⅲ-2] H A B体験プログラム③「エコキャンプファイヤー&先輩ボランティアとの交流会」(キャンプファイヤーの実際と火を囲んでのふりかえり)



少ない薪でのキャンプファイヤーを体験

火を囲み色々焼いて食べながらの交流

◇ [実習Ⅳ] 「救命救急法」



心肺蘇生とAEDの使用手順を実践



講師からの熱心な指導を受ける参加者

◇ <講義Ⅳ> 「青少年教育施設の現状と運営」・先輩ボランティアから



山川次長による講義の様子



豊富な経験など先輩からのアドバイス

◇ 修了証授与・閉講式



先輩ボランティアから修了証の授与



参加者には事業等での活躍が期待される

10 成果と課題

(1) アンケートの結果

①参加者の満足度（アンケート回収率 94.1%）

単位：%

設 問 事 項	満 足	やや満足	やや不満	不 満
事業全体をとおしてはどうでしたか。	93.8	6.2	0.0	0.0
事業のプログラムはどうでしたか。	100.0	0.0	0.0	0.0
事業の運営はどうでしたか。	100.0	0.0	0.0	0.0
職員の指導・助言はどうでしたか。	100.0	0.0	0.0	0.0
ボランティアの対応や指導・助言はいかがでしたか。	93.8	0.0	6.2	0.0

参加者17名に対して事業後に行ったアンケート調査の集計結果は、表のとおりであった。

5つの項目全てにおいて、「満足」が高い割合を占めたため、この事業は概ね好評であったといえる。

②自由記述

- ・講義も堅苦しくなくて聞きやすかったです。 (10代女性)
- ・このプログラムに参加していなければわからなかったことや初めて知ったことがあったのはもちろん、ここに来たからこそ味わえた達成感等がありました。 (10代女性)
- ・期待以上の楽しさでした。 (20代女性)
- ・もっともっと花山が好きになっちゃいました。都合が合えばどんな活動でも行きたい。 (10代女性)
- ・とても楽しかった。自然に囲まれてとても気持ちよかった。 (10代女性)
- ・(職員が) 初めてなのに優しく、笑顔で話してくれて、とても安心しました。 (10代女性)
- ・(ボランティアが) 面白いし、色々なことを教えてくれるし、すごく勉強になりました。 (10代女性)
- ・いろんな企画があり、講義あり実習ありで充実した楽しい時間でした。 (10代女性)
- ・ここでしかできないことをたくさん経験させてもらいました。ありがとうございました。 (10代女性)
- ・(3日間は) とても短く感じました。 (10代女性)
- ・ボランティアの大変さが今回よくわかりました。先輩方の努力によって(自分が) とても花山好きになれたのだと思います。 (10代女性)
- ・ただ学ぶだけだと思っていましたが、とても楽しい時間を過ごすことができ良かったです。 (20代男性)
- ・ボランティアとしてお役に立てれば……。ただし、その為にはまだまだ学ぶ必要があることを痛感しました。 (30代男性)

(2) 成果

- ・講義や実習など各プログラムの関連性（連続性）を考え、つながりをもたせたプログラムを意識したことにより、スムーズな流れで事業が展開できた。また、動と静の活動を組み合わせ、メリハリのあるプログラムの構成ができた。更に、朝のつどい後にPA体験を取り入れるなど、時間を有効に活用することができた。
- ・特に、今年度はアイスブレイクと冒険の森体験の実習からスタートしたことで、参加者同士の緊張感が早い段階で和らぎ、参加者にとって取り組みやすく良い雰囲気の中でその後の活動を進めることができた。
- ・今回、多くの登録ボランティアやボランティア経験のある方々に参加していただくことで、職員のみでは手薄な部分、特にグループごとの活動時における参加者の支援や安全管理の面での協力を得ながら、十分な体制をとって運営することができた。

(3) 課題

- ・参加者30名募集のところ17名の参加となったが、スタッフの体制や実践的な活動プログラムの内容等を考えると、20名が適正人数ではないかと考える。したがって、結果的にはスタッフ側にとっても参加者側にとってもやりやすい状況で事業を実施することができた。このことを踏まえ、次年度以降については参加者を20名募集する方向で検討していく。
- ・協力していただいた先輩ボランティアにとって、プログラムの中でスタッフとして参加者に関わる場所とそうでない場所との区別が曖昧であったため、どのように動くか迷う場面もあった。今後も継続的に協力を依頼していくことを考え、そのような点を踏まえたプログラムを検討していく必要がある。
- ・事業終了後、登録したボランティアがより多くの事業や研修等に参画できるようにしていくことが大事である。今後、メーリングリストを活用した事業等の伝達システムにより、ボランティアとの連携を強化しながら、年間を通して計画的に事業や研修等への参加を進めていきたい。

